

コンクールサポートボランティア 活動レポート

第9回コンクールを支えたボランティアから、新メンバーを中心に今回の活動についてレポートします。

♪ 会場運営サポート部門 伏見 真利子さん

毎年山形市から通い続けている仙台クラシックフェスティバルで娘と会場ボランティアの活動をし始めました。経験の浅い自分に務まるのかと不安を感じながら、今回はコンクールでの活動に初挑戦。

当日は2階担当。一番気を遣ったのは途中入場のお客様をご案内する際、扉の開け閉めなどで騒がしくならないよう速やかにお席にご案内することです。開始前の事前の打合せやベテランボランティアの方々の援助、何より出場者が最高の演奏ができるように、お客様には演奏を楽しんで頂けるようにと活動するベテランボランティアの皆さんの熱い想いに共感して活動することができました。

お客さまの笑顔、そして素晴らしい演奏に触れ、ボランティアとしてお手伝いできて良かったという気持ちでいっぱいになりました。

仙台国際音楽コンクールから若い音楽家たちが世界へ羽ばたいてほしいと応援しています！！



入場口でチケット確認

♪ ホームステイ受入れ部門 臼井 梨紗さん

初めてのホームステイ受入れで、出場者が我が家に来るか来ないかも分からず、滞在日数も不明。そんなドキドキも家族皆で楽しんでいました。ゲストのヴァイオリニストは、本来は優勝を目指していたが惜しくも次の段階へ進めなかったため、いざ来ることが決まった時は喜んで良いのか複雑な気持ちに…。でも来てくれた彼は気持ちを切替え、仙台を満喫、私達も最高の思い出を作ろうと毎日を楽しみました。



さよならパーティーでゲストの出場者と記念撮影

英語が苦手でも、笑顔と音楽があれば心は通じ合い、一つになれると感じました。彼が我が家にもたらした影響は大きく、夫はクラシックに夢中になり、娘達は彼に憧れてヴァイオリンを真剣に練習するように。私は次に彼と会う日、そして3年後の受入れを思い、英会話を始めました。人との出会いが人生を変えることを実感し、心から感謝しています。

※ホームステイは次の段階に進めなかった出場者のうち、希望者が利用することができます。

♪ 出場者サポート部門 吹越 南奈さん

大学の授業や資格取得で身につけた英語を活かしたいと思い、このボランティアに初参加しました。初めは英語力が通用するのか不安でしたが、活動を通じてコンクール運営への貢献を実感することができました。

交流サロンでは、出場者への応援メッセージを回収し、外国人来場者からの文書を日本語に翻訳。言語の違いを越えて思いをつなぐサポートができ、大きなやりがいを感じました。

また、高校時代に放送部で培った経験を活かして英語での場内アナウンスにも初挑戦。今回の活動を通して、ボランティアの楽しさと意義を実感することができました。今後は同世代にも積極的に参加を呼びかけていきたいと思います。



出場者をご案内

♪ 広報宣伝サポート部門 横尾 大輔さん

先輩ボランティアの「大丈夫、何とかなる。」を信じ、英語力を考えず“国際”音楽コンクールのインタビュー担当に手を挙げました。

予選を終えた韓国の出場者に「インタビューさせてください」を英訳したカード [Could I get a quick interview?] を見せ、「クド アイ…」と音読。ビギナーズラックか、みごと快諾。出場者サポート部門の方に通訳していただき、何とか文章にまとめ編集担当に提出。笑顔を引き出すのが上手い写真担当が撮影。皆の力を合わせ紙面ができていきます。

翌週、韓国の彼はセミファイナルに進出し、その演奏を聴く客席には、インタビュー特集のコンチェルト(9-4号)が。多くの人にコンクールを知ってもらう広報宣伝サポート部門のやりがいを感じました。



予選演奏後の出場者へインタビュー

発行：第9回仙台国際音楽コンクール 広報宣伝サポートボランティア

[コンクール公式 X (旧Twitter)] @sendai_simc

[ボランティアブログ X (旧Twitter)] @simc_volblog

問合せ：仙台市市民文化事業団音楽振興課(仙台国際音楽コンクール事務局) Tel: 022-727-1872 / e-mail: info@simc.jp / URL: https://simc.jp

SENDAI
INTERNATIONAL
MUSIC
COMPETITION
for Violin & Piano

仙台国際音楽コンクールニュース

コンチェルト

Concerto



Vol.9-6

(2025.12.19 第9回コンクール関連 第6号)

リチャード・リンさん インタビュー

(第5回 [2013年] 仙台国際音楽コンクール ヴァイオリン部門優勝)

10月に開催された仙台クラシックフェスティバル出演のため来仙された、リチャード・リンさんにお話を伺いました。

仙台国際音楽コンクール出場後、音楽に対する取り組み方について何か変化はありましたか。

仙台的コンクールに出場したのはカーティス音楽院(アメリカ)を卒業してすぐの時で、ソロイストになりたいと思っていました。そのあと室内楽を演奏するなどいろいろな経験をし、自分の音楽スタイルができてきたと思います。また、たくさんの国を巡って演奏するのですが、健康管理の仕方や、過密な日程のなかで集中して演奏準備をする仕方がわかってきました。この前初めてショスタコーヴィチを演奏しましたが、その直前まで今回のリサイタルの準備をしていました。仙台国際音楽コンクールに出場した際、予選を受けているとき既にファイナルを見据えてコンチェルトの練習をしていたのですが、そういった経験が厳しいスケジュールをこなす今の状況に活かされていると思います。

プログラム構成を考える際、どのようなことに気をつけますか。

多様性を大切にしている、プログラムに異なったテイストを含めるようにしています。たとえば、今回のリサイタルでは、ブラームス、ドヴォルザーク、ラヴェルを弾きますが、ゆったりした感じ、落ち着いたどっしりした感じを表現するのと同時に、早いパッセージを含む曲をミックスして、同じロマン派の作品でも違いを出すようにしています。食べ物でもラーメンばかりでは飽きてしまうので、寿司や牛タンを食べたりしますよね。音楽のメニューを考える時もそれと同じです。

共演者とはどのようにコミュニケーションを図っていますか。

叔母が台湾の大学で日本語の教授をしているなど、家族が日本との深いつながりをもっており、私も何回か日本に来ているので、リハーサルの時など日本語で話していることはある程度理解することができます。やはり心を通わせるための言葉として大切なのは音楽です。共演者の方とも音楽を通してすぐに友だちになることができます。

2020年にはアメリカのChamber Music Society of Lincoln Centerのメンバーになり、年上の経験を積んだ優れた音楽家の方たちと知り合ってから、他の方たちの意見をよく聞いて音楽をつくっていくようになりました。

今回もお忙しいスケジュールだったと思いますが、リラックスする時間は取れましたか。また、好きな日本食は何でしょうか。

今回は仙台に来てから、ひとりで駅近くの末廣でラーメンを食べ、隣のゲームセンターへ行きました(笑)。ラーメンのほかには牛タン、カニが大好きです。昨年、北海道へガールフレンドとカニを食べに行き、そこでプロポーズしました。

今弾いていらっしゃるヴァイオリンは、サミュエル・ジグムントヴィチがリンさんのために製作したものと伺っています。リンさんがこの名器で演奏するようになった経緯と楽器の特徴を教えてください。

サミュエル・ジグムントヴィチはとても有名なヴァイオリンメーカーで、彼の製作した楽器は非常に高価です。2018年にインディアナポリスのコンクールで優勝し、そのときジョゼフ・ギンゴールドという名のストラディヴァリウスのヴァイオリン(1683年製)と、ジグムントヴィチが作ったヴァイオリン(2017年製)の2挺を4年間貸与されました。

ストラディヴァリウスの方はゴージャスな音を出すことができましたが、私はジグムントヴィチが作ったヴァイオリンの力強く多彩な音に感銘を受けて彼に製作を依頼しました。貸与されたものと同じモデルで、しかもまったく同じ木材を使って製作してくれたヴァイオリンが2022年にできあがり、それが今、演奏会で弾いているものです。



リチャード・リンさん

リンさんの練習はどのようなものですか。ルーティーンワークのようなものはありますか。

スケジュールが忙しいのでルーティーンで毎日行っているような練習はないのですが、3～4か月に一度くらい2～3週間本番がない時があり、その間、カール・フレッシュヴァイオリン教則本を毎日弾いてスケールを練習します。

またコンサートに意識的に新しい曲を入れるようにしていて、それに取り組むことが練習になりますし、プログラムの幅を広げることにもなっています。

仙台のファンの皆さんに一言お願いします。

仙台は私の第二の故郷で大好きな街です。来るたびに仙台国際音楽コンクール事務局、仙台フィル、そして聴衆の皆さんといった懐かしい顔に会うことができます。またこれからも何回も仙台を訪れ、音楽を届けたいと思っています。

リチャード・リンさんは、2013年、第5回仙台国際音楽コンクールヴァイオリン部門で優勝したときと変わらず若々しさにあふれる方でした。

筆者はせんくら二日目のエヴァン・ウォンさん(ピアノ)との共演を聴きましたが、リンさんが最初のブラームスのヴァイオリン・ソナタ 第2番 第1楽章を弾いた後、遅れてきた観客が席に着くのを待っていてくれたときの姿に彼の優しい人柄がでているのを感じました。ぜひまた仙台にお迎えし、ジグムントヴィチ製のヴァイオリンの多彩で表情あふれる音に浸りたいと思います。



仙台フィルハーモニー管弦楽団 コンサートマスター 神谷未穂さん・西本幸弘さんインタビュー

第9回仙台国際音楽コンクールを終えた、仙台フィルコンサートマスターの神谷さん、西本さんにお話を伺いました。

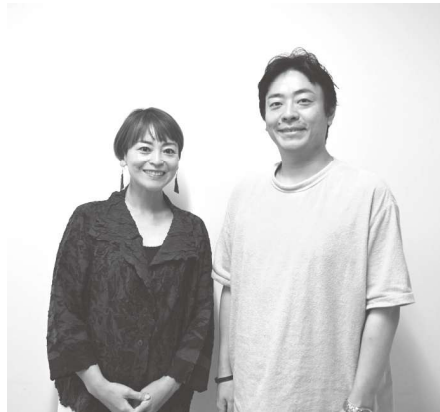
特に印象に残っている出場者を教えてください。

また、どのような点で印象的でしたか？

神谷：私は今回ピアノ部門を担当しました。やはり上位3名の出場者は素晴らしかったですね。1位のエリザヴェータ・ウクラインスカヤさん（ロシア）と第2位のアレクサンドル・クリュチコさん（ロシア）は非常に演奏に余裕があり、まるでリサイタルの演奏を聴くようでした。ウクラインスカヤさんは自身の世界観をしっかりと持ち、余裕さ感じられました。いつも笑顔でオーケストラにも気配りし、とても感じが良い出場者でした。クリュチコさんはラフマニノフのカデンツァが、本当に祈りのような演奏で震えるほど感動したことが特に印象に残っています。

そして第3位の天野薫さんは矢代秋雄を弾きこなせる11歳の演奏家がいることに驚きました。モーツァルトも良かったですね。上位3名は今後、世界でも活躍するだろうと思いました。

西本：私はヴァイオリン部門の担当でした。（今回は1位なし）第2位のムン・ボハさん（韓国）は、とても余裕を持って演奏しているのが印象的でした。第3位のジャン・アオジュ（中国）さんは弾き始めるとまるで巨匠のような演奏となっていたのが特に印象に残っています。お二人は共通して、笑顔で演奏してくれました。その結果、我々オーケストラもリラックスできましたので、すごく良い印象を持ちましたし、楽しく演奏できました。



神谷未穂さん 西本幸弘さん

今回のコンクールで準備が大変だった課題曲はありましたか？

神谷：断トツで矢代秋雄のコンチェルトです。コンクールでは1回のリハーサルですぐ本番なので、余裕をもって演奏するために事前の練習に特に時間をかけて準備しました。（矢代秋雄のコンチェルトがコンクールファイナルで演奏されたのは今回が初めて）

西本：ヴァイオリン部門はこれまで演奏されてきた課題曲ばかりだったので、特に大変だったという印象はありませんでした。ただしボリューム感があって負担が大きいバルトークのコンチェルトは気を遣いました。



ヴァイオリン部門の課題でコンサートマスターとして演奏する課題がありましたが、ご自身がこの課題に取り組むとしたら、どう向き合いますか？

神谷：以前、コンサートマスターの位置から一番離れているティンパニーの席で弾いて時差がどのくらいあるか確認してみました。だから自分が弾く時はその時差を考慮して演奏してみます。

打楽器の奏者、間にいる管楽器の奏者それぞれに対してアイコンタクトでしっかり音出しの指示することが大切だと思います。オーケストラを味方にするにはどうしたら良いかもいつも考えて演奏しています。

西本：前回のコンクールまでは、出場者の隣に私（もしくは神谷さん）が座っていましたが、出場者の指示がうまく伝わらないと楽団員は我々を見て指示を待つので、今回のコンクールから我々は退席し、通常の演奏会通りの席次としてもらいました。【注記1】

向きあい方そのものは通常のコンサートと変わらないでいいんじゃないかと思います。私は元々コンサートマスターを目指していましたので、「オーケストラがどうしたらハッピーになれるのか？」を考えて演奏しています。相手あってのことなので「仙台フィルはどういうオーケストラなのか」を感じ取って対応することも大切だと思います。簡単には経験できない貴重な機会だと思って課題に向きあってほしいと思います。

【注記1】今回出場者の隣には、第1ヴァイオリン首席奏者の宮崎さんが座っていました。出場者にとっては結果としてよりシビアな設定になったかもしれません。

コンクールの期間中、ご自身のコンディション等、特に注意して過ごしたことはありましたか？また、決まったルーティーンはありますか？

西本：コンクールでは「出場者その人の人生がかかっている」と思うと緊張感が違いますね。

神谷：人生がかかっていると思うと疲労感も違いますね。コンクール期間中は特にコンディションには大変気をつけていて、良く食べ、良く寝ました。色々な出場者が来るので、当日に誰が演奏するかを把握するために早起きをし、会場に入りました。

西本：コンクールに限りませんが、仕事開始の3時間前までに起きると決めています。自分で朝食を作って食べていますが、基本的に1日2食なので、朝は1.5食分を食べています。

また、可能な限り自分1人の時間を作るようにし、スイッチの切り替えをしていました。



仙台フィルの第2ヴァイオリン首席奏者として川又明日香さんが昨年入団されました。

仙台国際音楽コンクール出場者で初めての入団者とお聞きしましたが、どのように思われましたか？

神谷：嬉しいですね。コンクール出場者だったと入団時は知らず、後から聞いてびっくりしました。通常は出場者とはコンクール期間だけの関わりですが、自分たちがどこかで育てた感があってとても親近感を感じました。

彼女が自分たちと同じ仕事、特に仙台フィルを選んでオーディションを受けてくれたことも嬉しかったです。

西本：僕は彼女がコンクールに出場した時のこととかを色々聞いていたように思います。仙台フィルで出場者のためにできることは何なのか、これまで先輩の皆さんから教えて頂いたことは沢山ありましたが、これからは後輩達を感じていることを吸いあげてオーケストラと共有化することもコンサートマスターの役割のひとつだなと思いました。今回はコンクール経験者として、どうサポートすればよいか彼女からも話を聞き参考にしました。

若い入団者が続き、ホストオーケストラとしてコンクールへの取り組み方に変化はありましたか？

神谷：若い団員には体力勝負であること、長丁場なので健康管理を十分配慮するよう話をしました。

西本：演奏をしたことがない課題曲を準備することは、若いメンバーには大変な負担だと思いますが、自身と同年代の出場者との共演により、新しい刺激、充実した時間の共有等の機会になったのではないのでしょうか。

神谷：仙台フィルの管楽器の新人メンバーが、つい最近コンクールに挑戦しました。確かに出場者と変わらない世代ですからね。

西本：新入団の若いメンバーはしっかり個性は持ちながら、何でも器用にできるメンバーが多いようです。

もしかしたら自分が同じ年代だった頃よりもよほど楽にやっているんじゃないかと思えることがあります。

神谷：音源についても、かつてはレコードで、私たちの時代はCDで、今はYouTubeで簡単に世界中の音楽を聴くことができます。

西本：出場者である若い人たちのレベルアップでコンクールのレベルが上がる。そしてその力を借りながら仙台フィルのレベルがどんどん上がる。そしてさらにコンクールのレベルが上がっていく。いい流れですね。

コンサートマスターとして今後挑戦したいことは？

神谷：前回の海外公演は2013年で東日本大震災後のロシア公演でした。機会があれば、ぜひまた取り組みたいですね。

西本：ツアーもやってみたいです。

神谷：踊りと音楽はすごく親和性があると思うので、ジャンルを問わず仙台フィルで踊りとコラボしてみたいです。

西本：オペラを中心とした、劇場で演奏される曲に積極的に取り組みたいと思います。この対応ができるオーケストラは機動力が全然違いますから。日によって演奏のタイミングや状態が大きく変わります。そこでしっかり自分たちの耳で音合わせしていく能力がオーケストラにはとても大事です。この能力を高め、さらに機動力に磨きをかけていきたいと思います。

あとは新しい音楽ホールができますので、さらに大きい編成の曲を演奏することも視野に入れていきたいと思います。今後のオーケストラ運営の転機になればと思います。

仙台市が建設を予定する新しいホールは2031年度開館予定となっています。コンクールの運営面で変更点が出た場合、我々ボランティアの関わり方も変わるかもしれません。出場者の皆さんに対し、よりホスピタリティが高まるように、今からステップアップができるよう準備し、発信したいと思いました。